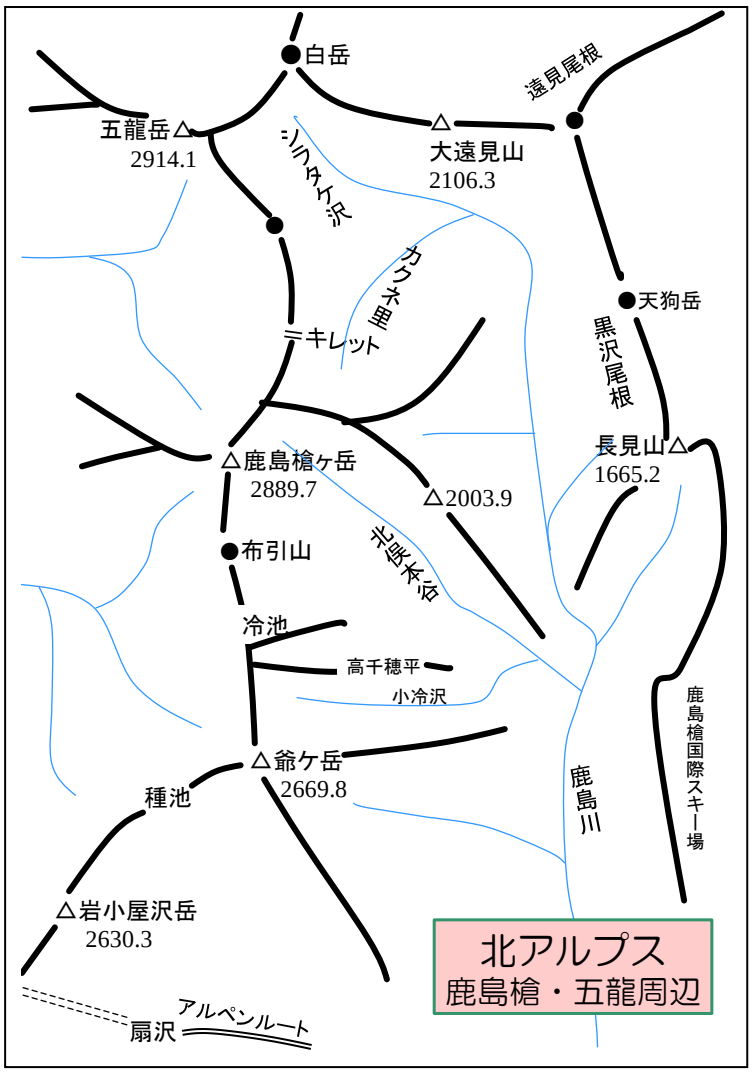
踏　み　跡　＜ My mountains ＞

北アルプス	扇沢から爺ケ岳	No. 128

昭和４４年６月４日
北アルプスの中でも後立山の稜線は、東京から近い割には中々出かけるチャンスに恵まれなかった。理由のひとつは交通が便利なせいで盛夏の混雑がひどいという点にある。
今年は中央アルプスでの実績もあり、体調もかなり良いので交通の便利さを利して後立山のラッシュアタックしてみることを考えた。まず手始めに種池から入ってみることにし、この山行を計画した。
八王子発 0 時 04 分　アルプス 10 号。家で夕食をとり、ゆっくり休んでからの出発で間に合う。

昭和４４年６月５日
信濃大町 5 時 26 分、駅前広場の片隅で朝食。
晴れ渡った初夏の早朝は空気が美味しい。
葛温泉に向かう何人かのパーティを乗せたタクシーが出て行くと駅前は静かになった。
信濃大町は、中央線ならば甲府、飯田線ならば駒ヶ根などと同様駅から山並みを楽しめるのがうれしい。
まずひときわ大きいのが左の蓮華岳と右の鹿島槍ヶ岳。蓮華の左に小さいながらもかなりの雪を見せる北葛岳、鹿島槍の右に見えるのが五龍岳。五龍岳は残雪期に「御菱（ごりょう）・・・割菱」の雪形を見せると言われている。鹿島槍の左に見える比較的のっぺりとした山容ではあるが男らしい山ひだを見せる山が爺ケ岳である。この山は種まき爺さんの雪形を見せ、安曇盆地から見られるいくつかの雪形の中でも傑作の内に入ると言われている。

黒部湖の入口の扇沢へ行くバスは 6 時 30 分発。
ダムへ行くらしい 5，6 人の老人の団体だけが一緒で、登山を目的とした乗客は私のほかにはいないようだ。大町の扇状地の北端で鹿島川を渡ると、道は丁寧に舗装された有料道路に入る。黒四ダム工事のために切り開かれた長野県側からの「大町ルート」の起点である。山の中とも思えぬような滑らかな道を突っ走り、扇沢着は 7 時 10 分。
トンネルとトロリーバスとをちらっと横目で眺めただけで、水を汲んで扇沢の出合いまで下る。
昔は扇沢の流れに沿って付けられていた種池への道も、今は右手の小尾根の腹に切り込むように付けられている。
ゆるやかに高度を稼ぐうちに背後の針ノ木雪渓が全景を現し、雪渓を挟むようにして蓮華岳と針ノ木岳、そして右にスバリ、赤沢と続く尾根。
はじめのうちはツツジとコブシが目立ったが、高度を上げるにつれてシャクナゲやコイワカガミが姿を見せ、足元に雪の量が多くなる頃になると傍らの湿った草むらにショウジョウバカマやシラネアオイの気品ある美しさも。初夏の山ならではの植物群が見られる。
モレーンのように高く盛り上がった大きな雪の塊を乗り越えると種池小屋。扇沢から登ること 2 時間 45 分。



小屋はまだ１／３ほどを雪の中に没し、わずかに屋根の雪解け水の滴りの音が聞こえるばかりで、まだ管理人すら入ってはいない。雪の上で腕まくりして昼食。黒部の谷をはさんで黒部別山を間に置き剣岳、

踏　み　跡　＜ My mountains ＞

剣御前から立山への連峰の連なりが大迫力で広がっている。（下左の写真）

太陽に輝く残雪の中の牧舎のような小屋と針葉樹林と。ひときわ雪が多く迫力のある剣、立山から目を外すと、北に冷池への緩やかな尾根と鹿島槍の双耳峰。（上右写真）
南西の岩稜は岩小屋沢岳の赤い色、その先はスバリから針ノ木へと連なっている。数組のパーティが立ち去り人気がなくなると、10m 以上離れている筈の山小屋の屋根から落ちるしずくの音が鼓膜に快く伝わってくる。食事の後は単独行の特権で 20 分程のまどろみ。冬が明けたばかりの万尺の峰々のかすかな心音が聞こえてくるような夢心地のひととき。
11 時 05 分種池を出発。爺ケ岳へは岩稜の静かな登り登るにつれて烏帽子から大天井、槍と続く尾根が視界に飛び出してくる。景色を楽しんでいるせいか高度差 400m の登りもさして気にはならない。
（下の写真：爺ケ岳山頂から）

爺岳から北へ下り冷池。冷池小屋周辺は冬季のテントサイトとして使われることからか、誠に不潔な状態だ。廃棄物と排泄物の散乱する「山の一番汚い部分」の集合とも言えるところだ。立ったままでレモンをかじって西俣への下りに入る。
高千穂平まで下ると、ここはさらにひどい状態で、悪臭と汚物とで足の踏み場もない状態。冬山でテント生活を経験したことがある者として、春になればこういう現象が起きることは想像もできるが、何とも不快な気分である。テントが 50 も 100 も張られるようなテントサイトについては夏冬を問わず誰かの管理が必要なような気もする。自分への反省も含め、ゴミもクソも適当にしなければ・・・・と痛感。
こんなことを思いつつ歩くうちに道はもう尻を擦るような下りになり、間もなくして西俣の出合いに到着。レモンの食べ残りを食べて北股の沢の水を口に含み下界の道を突き進む。
大谷原からのバスは 17 時にならないと来ない。今は 15 時 30 分、ぼんやり待っていてもしょうがない。バス道を歩いて行くか、スキー場を越えて築場へ行くか・・・・しばし熟慮の末、築場ルートを選択。
鹿島川に沿った平、鹿島の集落は春の日を浴びて長い冬の湿りを吹き飛ばそうとしているかのような清々しさが感じられる。大きな鯉のぼりが一本しまい忘れられているのが新緑の色と相まって印象的だ。
源汲の手前あたりで、後方から来たパブリカが木崎まで行くからとて乗せてくれた。車の中の夫婦は木崎で民宿を営んでいると言う。後の座席にはなにやら山菜の類が山積みになっている。
「今度は泊まりに来なさいよ」と言われて別れた。信濃木崎発 16 時 56 分パブリカの世話になったおかげで最終の急行新宿行に間に合った。

以上